

【巻頭言】

解放運動的人間像への序論

小森 龍 邦

一つの社会的変革ととりくむ人間に、その変革に相応した一種の「ねばり」とか「芯」の強さが求められる。「ねばり」強い人間のありよう、「芯」の強さを秘めた人間像ということである。

私は若い頃、革命後間もない中国を視察する機会に恵まれた。たんなる革命後の中国旅行というものではなく、期間も、東京を発って東京に帰るまで、おおよそ七〇日もかけた長い日程によるものであった。一九五六年の九月中旬から十一月の下旬に及ぶ日程において、哈爾濱、長春、瀋陽、西安、重慶、成都、昆明、上海、広州などの諸都市とその周辺の農村を視察する機会を得た。勿論、北京がこれらの都市を視察する中継点のような格好で日程がくまれた関係上、北京には、前後三回あわせて二十数日間も滞在した。

ちょうど中国のその頃の社会改造は、生産合作社、つまり日本の表現をもちいるなら、農業協同組合の社会主義化をめぐしている時期であった。

一九四九年の中華人民共和国建国宣言後の、社会主義化に向けて経済構造を変革していこうとする民衆（中国では人民と表現）の意欲と行動には目を見はるものがあった。

四川省の昆明市の街はずれまで、村の青年たちが、われわれ一行（日本青年団協議会）を出迎えてくれた。一人は二五歳の村長であり、あとの一人は二七歳の農協の組合長であった。

このとき知ったことであるが、彼らの合言葉に、「どこかに困難はありませんか。困難があればそれを私にやらせて下さい」というのがあるということであった。

われわれは、今日の日本における社会状況が閉塞状況にあることを知っている。「困難なことがあれば、それを私にやらせてもらいたい」というような気概のある青年とは、なかなか出会うことはない。一つの社会を変革しようとするときには、それ相応の、そこに新しい人間像というものが、社会変革と同時に並行するか、また前提として存在するかどうかである。

ドイツのナチズムに軍靴で踏みじられたフランス国民は、一大レジスタンス運動に結集した。有名な言葉「神を信じているものも、信じていないものも」という合言葉によって、とにかくナチズムの暴虐に抵抗するために、思想・信条をこえて結集しようとしたのである。

ルイ・アラゴン（一八九七年―一九八二年）の『共産主義的人間像』は、さまざまな人間の条件を「不連続の連続」と表現し、人々の力をそれ相応に結合させて、ナチズムに抵抗しようとした。団結に楔を打ち込まれないように、「人間の諸特性の高度の総合をめざす」（岩波『哲学・思想辞典』七五七頁 シュールレアリスム）の立場から、レジスタンスの理論的先頭に立った人である。

この時期の平和と人権を求める闘い、いわばそれへの社会変革を闘う人間像は、すぐれて、お互いの立場や条件を認め合うという気風が必要であった。

ここに提唱する「解放運動的人間像」とは、この人間のありようの中に、学びとらねばならないものがある。なぜなら、われわれは、「日本社会の歴史的発展の過程の中で形成された身分階層構造に基づく差別」（同対審答申）を受けてきたものであり、分裂、分断攻撃の手段であり道具に使われてきたからである。部落差別からの解放ということは、すぐれて主体的であり、差別に抗うものの力を団結の方向に結集することを任務と心得るような人間像が望まれるのである。

変革の時期に、それ相応の人間像を中国の社会主義的改造の過程において、青年の姿の中で見たことを述べた。だが、それは中国の社会主義建設が軌道に乗り出してからのことである。権力の争奪のために、軍事的に衝突していた頃のこと、それに加えて、日本帝国主義と闘わねばならなかった頃の、中国革命の担い手たちの人間像は並大抵のものではなかった。

毛沢東の指導する人民解放軍の規律は厳格であった。強制された厳しさというものでなく、思想的であり、その思想から湧き出る内発的、自発的なものであった。

一例を挙げれば、野宮の際に借りた戸板一枚を、敵の急襲にあつて、急ぎ逃げなければならぬときも、これを返還することを怠らなかつた。そのために、敵の弾にあたり、命を落としたものもいたという光景である。革命後まもない一九五六年、重慶の革命博物館を訪ねたとき、革命前にやむなく発行したガリ版刷りの人民解放軍の「軍票」を、政権獲得後、新しい政府の発行した「中国人民銀行」の紙幣と交換するために、「草の根」をわけて「軍票」の所持者を捜しまわったという。

中国革命のナンバー「2」と目されていた劉少奇（一八九八年～一九六九年）は、『共産党員の修養について』（一九三九年）という文章を書いている。この人と出遭った数少ない日本人の一人である私は、一九五六年の国慶節にちなんで北京市頤和園で行われた園遊会で、たまたま隣席に座し、若干の言葉をかわした。

『共産党員の修養について』の論旨は、その意味においても、「主体の確立」なくして、社会変革と言おうか、社会改造と言おうか、究極の社会革命と表現しようか、達成できないのであって、根本は、それととりくむ人間が、どのような「主体」を構築しつつあるか、もしくは「構築しているか」にかかわるというものであった。人民解放軍の場合は、徹底した「人民服務」の思想によって行動していた。

広州市から二〇〇キロも離れたところの、第一二三師団を訪ねて、兵士たちと一夜を共にした経験を持つ。車座になって『レーニン主義の基礎』の輪読会をやっている状況を見た。いささかマルクス主義、レーニン主義の知識を持っているとの自負心を持っていた私は、通訳を通じて「横ぐち」をついたりもした。

この兵士たちの軍歌は、「人民に服務する」ということを、具体例を並べて歌いあげるというものであった。例えば「農民に借りたものは、いかなる困難があっても返す」といった文言が、歌詞の中にあるといった具合である。

第一二三師団での体験は、一九七五年に中国を訪問したときのものであった。ちょうど、人民解放軍が階級の肩章をはずして、「指揮員」と「戦闘員」の役割分担にわけていた頃のことであった。これは軍の規律からして、よほどの高水準の「主体」の結合体でない限り、維持することは困難であろうと感じたものである。社会変革は、それをなすうにたる「主体」の強さを前提とする。そのことをつくづく感じさせられたというわけである。

部落解放をするということは、包括的な意味でいうと、やはり社会変革の一つの分野にかかわるものである。これに対応する「主体」はどうあるべきか。テーマとする「解放運動の人間像」で描き出そうとする試みである。

社会科学でいうところの、「階級分化」は、支配と被支配を生産手段の所有関係によって、その階級の位置関係が定まってくることを言ったものである。意識もまたおおむね、支配階級の意識と、被支配階級の意識として分化する。資本家階級は「労働者をできるだけ安い賃金で使えばよい」とする意識を持つ。被支配の立場にある賃金労働者は、「できるだけ高い賃金を求める」という意識になる。こんな具合に、意識もまた分化するのである。

その中で、個別に優遇される賃金労働者のいくらかが、資本家階級に媚を売り、隊列をみだすものが出てくる場合もある。ときには労働組合の名のもとに、組合の幹部が組合員をひこじって、階級的利益を裏切る場合もある。このような場合を、通常は支配階級からの「分裂政策」として分析する。

社会状況一般として、このような階級支配が不斷に行われているその余計に、さらに二重、三重の構造として、人間関係を「イビツ」なものに画策しているのが、身分差別なるものである。

江戸時代の社会構造で言うならば、「土農工商穢多非人」というものであるが、近代市民社会の装いをもつ、今日の社会構造から透視すれば、一般勤労者（勿論組織労働者も含む）の中の、前述したような階級分化にもとづく対立と、その裏切りが展開されているところへ、さらに江戸時代の出自を問題とする被差別部落民（穢多、非人、山窩）などの複雑多岐にわたる人間関係の分裂を、それなりに生産関係に照応させつつ、機能させられているのである。この複雑な糸のもつれを丹念に「解きほぐす」人間のねばり強さがなければ、「解放運動的人間像」ということにはならない。

これまで、私は部落解放運動にかかわって、「社会的立場の自覚的認識」という概念を提唱してきた。われわれの置かれている被差別の「社会的立場」を自覚的（実践的という意味も含む）に認識すれば、「われは何を為すべきか」にも、思いが進化するといった考え方によるものである。

しかし、それは甘かった。今の時代は、自殺、倒産など、経済はますますむずかしい状況の展開となっている。権力は総保守化、総反動化して、ひたすらファッショ化の方向に歩んでいる。こんなとき、肝心の自主的運動もそれに汚染され、彼ら権力に抵抗するような素振りを見せつつ、操られつつづけるという状況にある。

いよいよ「社会的立場の自覚的認識」は、フランスのレジスタンスのときのような、中国革命のときのような、これに対処する相応の「人間像」をめざす運動が具体的に展開されなければ、とても部落解放を実現することは不可能である。

「粘りづよい」「不連続の連続」「大衆への無期待献身」などなど、併記する項目（人間像）をどういう順序で提起するか。とにかく相当の緊張感に堪えられるような「人間像」とは何をさすか、議論を実践的に煮詰めたのである。